

## 生消協 第21回女性生産者交流会報告

- ・11月10日、熊本県熊本市の三井ガーデンホテル熊本にて第21回女性生産者交流会が開催、北海道から熊本まで13産地34名参加、パルシステム関係者・事務局関係者含め49名(内、1名オンライン)参加となった。
- ・1日目の交流会では水俣・不知火ネットワークの女性生産者2名より、新規就農にあたり「夫の農業に対する強い思いから就農したが、当初は不安があった。自分達の野菜を子供達が食べてくれるのがとても幸せ。おいしい野菜を作りたい思いから有機農法に挑戦した。新たに農業を目指す人達の助けになりたい」「子供の頃からみかん農家が憧れの職業だった。縁あってみかん農家の夫と出会い、農業研修時に食べた有機みかんが人生一番の美味しさであったことから有機みかん農家になった。パルシステムの有機農産物に理解ある消費者の方からのメッセージをいただくとやりがいを感じる」と報告された。
- ・その後、7つのグループに分かれ、女性生産者同士がお互いに生産者と生活者の両方の視点を大切に、交流を深めあうことを目的として①わたし、最近思うんです②毎日の暮らしの中で大事にしている時間～私のお楽しみ～③人とのつながりで大切にしたいもの④農業って大変！～でもこんないいことも～の4つのテーマについて話し合い発表となった。発表の内容は下記の通り。(報告順)
- ・農業の社会では、以前は男性が働き女性は家のことを中心にする役割分担がはっきりしていたが、先輩方が頑張ってきたおかげで、女性が認められるようになってきた。今の時代はお互い歩みより、得意とすることを感謝し合いながらやっていくことが大事という声があった。(3グループ)
- ・人とのつながりで大切にしたいものとして、農業は一人や単独のグループではできない。地域の人との出会い、つながり、信頼関係を大切にしていきたい。自分たちの野菜と、生産していない野菜の物々交換やレシピ交換は、メリットでもあり楽しみでもあるという意見があった。(4グループ)
- ・わたしが最近思うことについて、食に関わる立場になり、お弁当を例にミニトマトが彩りのイメージから味や栄養といった重要な存在になり、冷凍食品が野菜中心へのお弁当へ意識が変わっていった。農家のお嫁に入ることは家の中でも仕事でも、年中行事でも気を使う大変な思いをしてきた。次世代には同じ思いをさせたくないという意見があった。(7グループ)
- ・人のつながりを大切にしたいものとして、地域の人が若い人を応援していく雰囲気作りができていて、若い人がそれに答え、結果として地域一体となっていく。新規就農者は仕事が精一杯で出荷まで手が回らないところをパッケージセンターがサポートしている例がある。さらに、単身の就農者や農家同士のご縁もパッケージする取り組みもある。自宅を開放してマルシェを開催し、自分の世代で種をまくことで、地域とのつながりを大切にしている事例があった。(6グループ)
- ・後継者を残す手段について、自らが地域で輝いている存在であること。非農家からの嫁入が多い中で、家族内協定の推進による報酬や休日取得などを農業経営者に徹底させたい。安心して楽しんで農業に取り組むこと、日本全国にそういう女性が増えることを呼びかけたい声があった。(1グループ)
- ・毎日の暮らしの中で大事にしている時間や楽しみについて、大地の再生や農業が地球に与える影響を大切に、人間のエゴで無理をさせないようにしていきたい。農業をやる中で「直接」は大切、消費者と直接会い、直接聞き、直接声を届ける機会は、ごまかしの無い関係を意識でき、消費者が選択肢として判断するためには重要。自分たちの農業を自然の循環の中に入れていけるよう、消費者と一緒に広めていきたい。楽しみとしては新しい農法への挑戦や、農仕事の合間に自分の時間をゆっくり作ることができる。地域の仲間とスポーツや話し合うことも大切だという声があった。(5グループ)
- ・毎日の暮らしの中で大事にしている時間について、陶芸などのモノづくりやウォーキングなどがある。女性は仕事に子育てと大変だが、些細な楽しみだが応援していきたい。主婦の集まりなので食品ロスのお話が出て、

スーパーで商品の手前取りや、家庭でのごみについて考えていきたいという声があった。(2グループ)

- ・まとめとして、大津代表より、「世代交代が進む中で、農業の未来がある報告を聞いて勇気が出た。お金儲けの農業から、自分たちの暮らしが地域にあり食べ物やエネルギーまで自給できる生活に気づき、農家の利点を最大限に活かした農業を目指してもらいたい。農家のお嫁でよかったと思えるように」と呼びかけられた。
- ・2日目は、水俣・不知火ネットワーク、肥後あゆみの会の圃場や施設をバスで巡り、有機のみかん畑では木の剪定方法や病害虫によるみかんへの影響について、水俣・不知火ネットワークの松本代表より説明され、地域の資源を活かした「野草たい肥」づくりや、自家製の「ボカシ肥料」、天然のタケノコ、海藻、セリ、ヨモギ、アケビ等のエキスと海水などで抽出した「天恵緑汁」と呼ばれる自家製資材の製造や、有機トマト畑での天敵農法などの取り組みについて、肥後あゆみの会の澤村代表より説明がされると共に、「肥料や農薬について、資材業者に振り回されてはいけない。地域にあるものを活かして自分たちの手で作ることができる。何に力を入れ投資するべきか考えなければいけない」と呼びかけられた。
- ・その後、肥後あゆみの会による6次産業の取り組みとして、商品化された乾燥バジルやジュース、調味料などの加工品について、試食販売や、加工場の見学、提案レシピの共有などがされた。
- ・最後に、ランチ交流会では江尻消費者幹事からは、2024年の産地開催による女性生産者交流会は、「2年後の女性生産者交流会は、ぜひ、千葉でお会いしましょう」と呼びかけられた。

以上



画像左上：渡部副代表幹事挨拶の様子

画像右上：交流会でのグループ意見交換の様子

画像左下：みかん園地で説明する水俣・不知火ネットワークの松本代表

画像右下：自家製資材「天恵緑汁」を視察する参加者